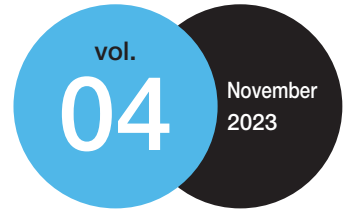
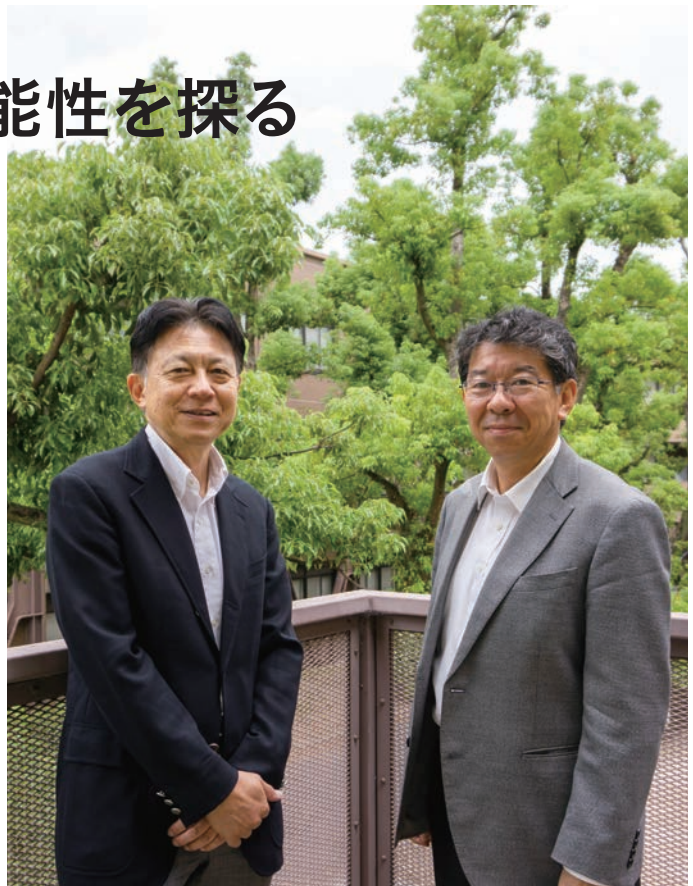


あかつき 道徳 TIME



GIGA スクール構想が本格実施されてから3年、学校現場にもICT活用がずいぶん浸透してきた。道徳授業においても例外ではない。だが同時に、「ICTを使ってみたが効果を感じられない。」「どう使うのがいいかわからない。」といった声も多く聞かれるようになった。道徳におけるICTの可能性について、ICT活用を推進するさまざまな立場の先生にお話をうかがいます。

道徳×ICTの可能性を探る



ICT活用で 子どもが学びとる授業へ

植田 熊本市はこれまで、情報活用能力をベースとした探究的学習や問題解決につながる教科横断的なSTEAM教育への取り組みを先進的に行ってきました。その中でICT活用も早くから進められてきたように感じます。このたびは、熊本市で特に中心となって取り組まれていた

本田先生にお話をうかがいながら、道徳授業におけるICTの可能性について考えたいと思っています。

本田 熊本市は確かにICTの活用が進んでいるとよく言われますが、ICTを活用すること自体を目標としてきたわけではなく、あくまでも最上位の目標は授業改善でした。熊本市では、二〇二〇年に「自ら考え主体的に行動できる人を育む」ことを教育理念に掲げ、これまでの「教

本田裕紀

(熊本教育センター指導主事)

熊本県の公立中学校教諭、熊本市教育センター指導主事、公立小学校教頭を経て、平成30年度より熊本市立楠小学校(タブレット先行導入校)校長。その後、令和2年度より熊本市教育センター副所長、令和3年度より熊本市立五福小学校(STEAM教育研究モデル校)校長を務め、令和5年度より現職。

植田和也

(香川大学教授)

香川県の公立小学校教諭から人事交流制度で平成15年度から4年間、香川大学へ。その後、公立小学校教頭、香川県教育委員会東部教育事務所主任管理主事、所長補佐を経て、平成25年度より香川大学教育学部准教授、平成29年度より現職。令和3年度より2年間、附属高松小学校長を併任。

師が教える授業」から「子どもが学びとる授業」へと軸足を移していくことになりました。子どもが自ら考え学びとる授業を実現するためには、自分で問いを立て、協働して学び、振り返りでメタ認知していくようなサイクルが必要ですね。そうした学習活動の質を上げるために、自分たちで「調べる」「撮る」「記録する」「考えを深める」「アウトプットする」ことのできるツールとしてデジタル端末を導入したのです。

植田 子どもが主役になるという目的のためにICTを取り入れたということですが、子どもたちにとってどんな変化がありましたか？

本田 子どもがそれぞれの興味に向かって、夢中になってわくわくしながら学習に取り組む姿が見られるようになりました。また、今までは挙手している子どもだけが発言するということが多かったのですが、みんながそれぞれのやり方で自分の考えを出せるようになっていきました。書くのが苦手な子がICTを使うことで自分の考えを表現できるようになったり、簡単に視覚化できたりすることで、自信をもてるようになりました。

植田 ICTを取り入れることで、一人一人が自分の考えを表現できるようになり主体的に学ぶ入り口に立っているですね。道徳授業でも一人一人が考えをもち表現することが大切なので、ICTを有効に使うことができると感じています。

ツールを選択して 自分の考えを表現できるように

植田 熊本市教育センターのホームページでは無料のデジタル教材を開いていますね。「心の数直線」が四種類も用意されていて驚きました。

本田 デジタル教材はすべてICT支援員が教師の要望に応じて作ってくれたものです。「心の数直線」については、最初はハート型のものを作ってもらったのですが、子どもたちが気持ちを伝えやすいツールをそれぞれに選択できるようになったらしいなと思います、シーソー型など何パターンか作ってもらいました。

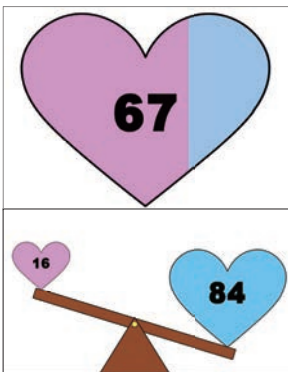
植田 子どもが選択できるというのがとてもよいですね。自分の考えを分かりやすく伝えたいと思ったときに、いちばん表現しやすい方法を選んで選ぶことができます。また、デジタルだと、教師が全員分をいっ

せいにすることができるので、全体の傾向をつかむこともできますね。

本田 最初は教師がツールを使うよう促していたのですが、次第に「先生、ここはシーソーを使っていいですか。」「私はハートにしよう。」と、子どもが自分で気持ちを表現しやすいツールを選ぶようになっていきました。相手に分かってもらうために主体的にツールを使う、そんな環境を目指していったらと思っています。

植田 そうすることで道徳の学びの深まりにもつながっていきますね。

本田 はい。「なんでそうしたの？」「ちよっとだけ青いのはどうして？」などと同じく問い返していくことで、友達の間での共通点や相違点を見いだして学びを深めることができます。言葉では表現できなくても、ツールで表現する機会を与えること



熊本市のデジタル教材「心の数直線」

で、子どもが言葉にしていくことのできるようになっていきます。

植田 先日、まさにこのツールを使っている授業を見ました。子どもの考えをいっせいに電子黒板に写したあと、すぐに子ども同士の話が始まっていきました。対話に時間を割くことができるというのもメリットの一つですね。

思考を整理して対話が深まる

植田 自分の考えを表現したうえで、その後の対話を深めていくことが道徳授業において重要ですが、対話がより深まっていくためのICTの有





効な活用方法がありますか？

本田 中学校になると教材文が長くなり、内容も充実してきます。アプリを使って自分の意見を入力して発表して、さらに対話もして……となると時間的にかなり厳しくなってきました。そのようなときは、思考メモとしてキーワードだけアプリ上に書き出していくという方法が有効です。

めに自分の考えを整理するときにはメモ程度でもいいというわけですね。

本田 大人も思考の整理のためにメモ書きをすることがありますよね。それと同じです。

植田 道徳科におけるICT活用の方法としては、他にも情報を深めることや情報の収集などが有効だと感じました。「自然愛護」や「感動、畏敬の念」といった内容項目の教材の場合、大自然などのリアルな映像を見てイメージをもつことができずし、教材を読んだ後に、「今はどうなっているのだろうか?」「自分たちの町ではどのような取り組みをしているのだろうか?」と疑問に思ったことを調べていくことで、自分の考えの根拠となる情報を見つける支援にもつながります。

本田 とてもよいと思います。道徳授業は決まったやり方から逸脱してはいけないというイメージをもつ先生が多いと思いますが、こう考えていくといういろいろな使い方ができることが分かりますね。

子どもの学びと

教師の学びは相似形

植田 ICTの役割、重要性がよく

分かりましたが、実態としては、道徳授業においてもICTの活用はなかなか促進されていません。

本田 今までの授業スタイルにICTを持ち込もうとするとどうしても難しい面が生じます。もちろん、ICTを使うことで時短をはかり、考え議論する時間を確保できるようにするといった使い方もあつていいのです。ただ、それだけになってしまつと授業は変わっていきません。「どんな授業にしたいか」という目標が先にあり、「その目標を達成するためのツールとしてICTが効果的に活用できるか」と考えていくとよいのだと思います。

植田 教師自身の関わり方が非常に重要ですね。「どう利用するのか」という教師自身の考え方がぶれないように使っていくのが大事ですね。

本田 もう一つ大切なことは、教師たちも学び続けるという姿勢です。子どもの学びと教師の学びは相似形です。私自身、新しいことを学ぶのは今でもわくわくしますし、楽しいなと感じます。先行きが不透明で将来の予測が困難なVUCA時代の中では、協働しながらウェルビーイングを考えていくことが大切といわれ

ています。今までの授業を踏襲するのではなく、未来の子どもたちを育てているという視点に立つて、私たち自信も学び続けていくことを大事にしないといけないと思っています。

植田 「教師が変われば子どもも変わる。子どもが変われば学校が変わる」とよく言われていますが、まさにその通りですね。ICTに苦手意識がある先生も多いと思いますが、子どもがアイデアを出してくれたら教え合ったりすることで、子どもと教師が一緒に変わりながら、授業も変わっていく。そうすることで学校全体もいきいきしていくという波及効果が生まれますね。

本田 端末の操作などは子どものほうが逆に得意なこともあります。先生が学ぶ意欲をもって子どもに「教えて。」と言うことで、その子の自己肯定感の向上にもつながっていきます。先生がちよつと考え方を變えてみて、同じ一人の学び手として一緒に学んでいくという姿勢をもつことが大事ですね。



熊本市教育センターのデジタル教材はこちらから

道徳授業のプロに聞く ICTの使いどころを吟味する

山本理恵

(千葉県東金市立東中学校教諭・千葉大学大学院)

道徳科における「宿題」の効果、学校現場における道徳教育が与える影響及び若手教師の育成について研究。学校現場では学校組織全体を巻き込む「道徳教育推進会議」を開催。千葉県教育委員会指導者用映像教材作成。第28回上廣道徳教育賞：最優秀賞受賞。令和3年度文部科学省優秀指導者教員表彰。



自分らしい授業スタイルの手助けに

ICTを活用する際には、教材との相性や生徒の実態をふまえ、本来に効果があるのかを吟味することを大事にしています。ここでは、特に効果を感じた実践例を紹介します。

まず『いつものバイオリン』という教材です。内容項目は「よりよく生きる喜び」ですが、生徒からは「友情」や「思いやり」などねらいと異なる視点の感想も出やすいため、事前読みをさせて感想文をタブレットで提出させます。その感想をもとに、ねらいに近い感想の生徒とそうでない生徒をあえて同じグループにしておくことで、ねらいに沿った話し合いが深まりやすくなります。

また、感想をもとに、発問の内容や授業中の生徒への声かけも工夫できることにより、目の前の生徒に寄り添った授業を展開しやすくなります。

今までは手書きの感想文を集約する作業に時間がかかっていましたが、準備時間が大幅に削減され、入念に授業計画が立てられるようになり、

ICTを取り入れた自分の授業スタイルが出来上がりました。

生徒の意欲を刺激する授業に

『二通の手紙』という教材は、他の教材に比べると意見の違いが出やすいので、タブレット上で生徒の意見を共有します。瞬時に一人一人の意見が詳細に見渡せることで「自分と違うことを考えた人がこんなにも

いるのか。」と生徒たちの関心が高まり、その後のリアルな話し合いが活性化します。話し合いの後に生徒たちの意見が変わったときは、タブレットに記入させ共有することで誰もがクラス全員の思考の動きを追えるようになります。生徒にとっては、周りの考えの変化も受け止めながら、ねらいについてより自分の考えを深くもてるようになり、教師にとってはクラス全体を巻き込んだ、誰も取り残さない授業を展開しやすくなるのです。

バディー制度を生かして

教師が一人だけで授業を改善することには限界があります。そこで本校では、ベテランの教員と若手の教

員がペアを組む「道徳のバディー制度」を導入しています。授業スキルやICTスキルなど、お互いの得意・不得意を補い合う関係を築き、授業づくりを生かしています。仲間と共にICTの効果的な使い方吟味することで、教材と向き合う機会が増え、より深い授業研究や教材研究にもつながっているのです。

これからは、学級や学校を飛び出し、日本中そして世界中の生徒同士がつながり、意見交流のできる道徳授業を実現させることも夢ではないと思っています。

道徳のバディー同士でICTの活用を吟味しているところ

